

Antonino De Francesco, *The Antiquity of the Italian Nation : The Cultural Origins of a Political Myth in Modern Italy, 1796-1943*, Oxford : Oxford University Press, 2013.

水野(角田)延之

本書は西洋近現代史研究者アントニーノ・デ・フランチェスコ(1954年ミラノ生まれ。現ミラノ大学正教授)によるイタリア近現代史の書である。2011年のイタリア建国150周年が、本書執筆の契機である。本書で描かれるのは、近現代イタリアにおいて自国の古代および先史時代が、現実の情勢を反映していかに研究、認識されたかであり、その史観がイタリアにおける様々な亀裂をいかに拡大または修復するものだったかということである。

本書の序章では、イタリアに存在した(している)自由主義、社会主義、キリスト教などの要素からなる分裂が言及され、国民形成過程の複雑さが説明される。そして、国民形成の重要な問題としてイタリア人民の先住性を取り上げることが本書の目的とされる。

第1章「民族の歴史的過去」では、ナポレオン・ボナパルト治下のイタリアが取り扱われる。主役は、イタリアの革命をフランスの影響による受動革命と解釈したことで有名なクオーコである。彼の『イタリアのプラトン』は最初の2巻(1804年)で、古代ギリシャのプラトンが、イタリアを旅しその文明のレベルに感動したことを述べる。だが後半の2巻(1806年)は、イタリアは文明のレベルは高いものの、政治生活の結合が不足しており、そのためにローマに支配されたことを述べる。これは外国支配を受けている同時代イタリアへのあてこすりである。クオーコは古代エトルリア人が半島を統一し、地中海を移動してギリシャその他に植民したと述べ、ギリシャ人とイタリア人の差異を表面的なものとした。イタリア南部のマグナ・グラエキアというギリシャ人地域もイタリアの一部であるとされた。こうしてクオーコはイタリアの地域主義問題の克服を意図した。だがデ・フランチェスコによれば、クオーコの同著はイタリアの国民創造に重要な役割を果たさなかった。

第2章「複数のイタリア」は、クオーコとは異なる古代観を説いたトスカーナ出身の歴史家ミカーリを主役とする。ミカーリは1810年に公表した『ローマ人支配以前のイタリア』で、古代イタリア半島に様々な諸民族が居住しており、イタリア人の起源が単一でなく多様であることを主張した。ミカーリはナポレオン下での出来事をローマになぞらえ、ローマによる統一を非難した。また彼は半島の多様性を消さない範囲でイタリア人の土着性の要素を重視し、北部のガリア人と南部のギリシャ人を侵略者とし、良い影響を受けたとは考えなかった。ミカーリの主張はジョベルティのようなリソルジメント期の連邦派に思想的影響を与え、イタリアにおいて国家論の重要な参照点となった。

第3章「多様性の中の統一」では、ミカーリの反響や、以降の時代の様々な起源論が紹介される。この章の重要なテーマはイタリア南部である。ミカーリは北部のガリア人、南部のギリシャ人を批判し、トスカーナを含む中南部をイタリアと同一視して半島全土を説明した。だがこれには北部派や南部派から異論があった。南部派代表は両シチリア王国関係者である。同国内には、シチリアの独立志向もあり、見解の相違があった。例えばナターレという識者は、シチリアの先住民族にとって民主主義が馴染み深いものであったと主張し、ギリシャ文明の影響を強調する傾向を批判した。そして首都ナポリにおける議会でシチリア代表として発言した。他方で古代シチリア人を原初のイタリア人と見るヴィーゴ

は、シチリア人とナポリ人に差異を見なかった。サヴォイア家主導の国家統一への立場も様々であった。デ・フランチェスコは、統一後、地域の過去への郷愁は統一と適合しくなり、むしろ対立物となったことを説明する。

第4章「他のイタリア」では、19世紀後半の古代論が取り扱われる。起源論に関心が薄く、ローマの統一事業を評価するマツイーニや、サルデーニャ出身であり、ローマの支配に対する古代の島民の抵抗を称えた反中央集権主義者のアスプローニなど、多くの識者が紹介されるが、バジリカータ人ラチオッピの議論が重要なものとして詳説される。統一期に、南部ではブリガンタッジョと呼ばれる反乱が起こっており、南部を異質な地域とみなす風潮が現れたが、ラチオッピは自身の地域がイタリアという名称の起源であることなどを論じ、諸問題はあるが、バジリカータがイタリアの一部であると主張した。デ・フランチェスコはラチオッピの主張を、小諸国家から構成されるイタリア、という国家像と解釈し、これが19世紀後半にイタリアの文化的アイデンティティーに関わったとする。

第5章「民族の人類学」では、統一イタリアにおける古代研究に貢献した学問として人類学が取り扱われる。人類学者の中でも、頭骨測定法による研究を行ったシチリア出身のセルジの存在が大きい。彼の主張は、古代イタリアの住民がインド＝ヨーロッパ系ではなく地中海系であったということであり、北からではなく南から来たということである。だがアーリア人も確かに北から侵入しており、イタリアは人種で分かれたることになった。そしてローマによる統一がイタリア人にラテン的特性を与えた。そのためセルジにとって起源の差異は文化的統一性を崩すものではない。だが疑似科学的遺伝学により南部を分析したニチェーフォロは、セルジの研究を利用し、南部の遅れの真の理由を、アフリカ起源(地中海起源)のイタリア人の道徳的遅れに求めた。セルジ自身も後に議論に参加した。セルジは、南部が融和可能であることを信じたが、南部の人種的劣性というニチェーフォロの議論は、20世紀初頭のイタリア知識人に影響した。

第6章「ローマへの回帰」では、古代ローマの統一事業を評価する議論が紹介される。代表は、サルデーニャ系の家族に生まれた古代史学者パイスである。彼は初期にはサルデーニャ島やシチリア島の文化、文明に興味を持ち、ローマの支配を非難する反ローマ史観を有していたが、後に考えを変えた。シチリア島において、インド＝ヨーロッパ系のラテン人がセム系のカルタゴ人に勝利し征服を行ったことで、同島を含む地中海地域の歴史がヨーロッパ水準に移されたと考えるようになったのである。彼は19世紀末の社会的、政治的危機から愛国者となり、国外のモデルから離れ、古代ローマに回帰することを希望した。20世紀前半にサルデーニャ島についての著書を出した時には、行政的地方分権を支持しつつも、島民にとってイタリア性が根源的であることを主張した。こうして、クオーコ以来侵略者とされてきたローマの評価は、時代の生んだ愛国主義により反転した。

第7章にして終章「イタリア・ファシスト帝国、人種政策そしてエトルリア学」では、ファシスト政権期の情勢により新たなエトルリア認識が現れ、それが民族観にとって重要であったことが述べられる。第一次大戦以降、諸学問は国家の意志に統合される。ファシスト政権は、愛国心から来る反ドイツ主義を、地中海への侵攻政策に利用した。考古学的な発掘調査はマルタ島のイタリア性を主張し、マルタが文明の起源であるとし、東からのアーリア的な影響を否定した。セルジによるイタリア人の地中海起源論も地中海政策に利用された。この時期の起源論は、半島外からの文明の流入よりも、半島内での文明の形成

過程を重視するものであり、これは国家のアフリカ侵攻政策と関わる認識であった。エトルリア文明のイタリア性という主張もここから生まれた。こうして、出自を含む半島住民間の差異は、新たな集合的アイデンティティーへと統合されることになった。

著者のデ・フランチェスコは、西洋近現代史における連邦主義に強い関心を持っている。それはミカーリや両シチリア王国の識者ナターレへの詳細な分析から看取される。リソルジメント期の連邦派も本書で度々登場する。著者はアメリカの連邦主義や、フランス革命期連邦主義、そしてフランス支配期イタリアにおける連邦主義などについて多くの業績を有しているが、本書はそれらの続編と位置付けられよう。つまり本書を含むデ・フランチェスコの諸研究の特色は、時間と空間を可能な限り拡大した上での、諸々の連邦主義の総合的分析にあるといえる。本書では、イタリアの南北間のみならず、南部間(シチリアとナポリ)にも、さらにはシチリア島民間(ギリシャ系住民とその他の先住民)にも対立意識が存在することが触れられているが、分断の重層性へのかような卓見も、地方の自律性に意識的な立場から生まれているといえる。学的キャリアの後半期にローマを評価する立場に転じたパイスが、統一図式を支持しながらもサルデーニャのためには地方分権を支持する、という複雑さを細かく見ていることも、連邦主義への著者の見識を示すものであろう。

著者の分析の冴えは各所に見出されるが、ファシスト・イタリアとナチス・ドイツの弁別はその一例である。ファシスト期イタリアには、外国のモデルに倣うことを拒否し、イタリア独自のモデルを構築することを望む愛国主義が存在し、反ドイツ感情も存在した。例えばマッツェイという学者は、1942年の『人種と民族』の中で、イタリア人を地中海系と定義し、アーリア系との共通性を無とした。彼の民族論は、アフリカ人との混血は警戒するが、反ユダヤ主義を決定的な要素とはせず、逆にセム人の生物的劣性というテーゼを拒否するものであった。イタリアに反ユダヤ主義は確かに存在し、ナチス理論への傾倒者もいた。だが人種論者たちが一枚岩でなかったという著者の指摘は傾聴に値する。

さて、評者の専門はイタリア史ではない。そのためイタリア史の具体的な内容についての論評は専門の方々に委ねるとして、ここではフランス革命への言及部分に触れておきたい。著者は本書の第1章をフランス革命期の古代論から始めている。それによれば、革命期前半のフランスでは、ブリッソーがアメリカに傾倒し古代に無関心であったように、愛国派にとって古代ローマは支持できない対象であった。そして著者は、古代の神話が共和派のレトリックに浸透し古代が参照されるようになるのはジロンド派追放(1793年6月)以後であると読み取れるように記している。だが少なくともマルセイユ史を見る限り、これは正確ではない。1792年8月10日のテュイルリー宮襲撃による王権停止は、マルセイユを含む地方連盟兵の活躍に負うところが大きい。そのためマルセイユ人は自己を誇り、この事件を古代以来共和政に親しんできたマルセイユ史に接続した。マルセイユのジャコバン派は、首都パリすらしのぐほどの革命的情熱を有したが、それは独自の古代観と結びついていたのである。このようなことは、著者は当然把握していると思われるため、もう少し説明していただきたかった。だがこのことは、本書の分析手法を用いてフランスあるいはその他の国の近現代史を描く可能性が残されていることを意味するのかもしれない。著者自身、スペイン、ギリシャ、旧ユーゴ諸国、トルコといった地中海諸国の古代認識について論じる国際学会を、2015年5月27日にパリで召集している。本書以降の著者の視線は広大な地中海世界に向けられているようである。本書の続編が待たれるところである。